

説教 『愛が私たちの味方』 山本 護 牧師  
聖書 詩編 118:5~9 / ローマの信徒への手紙 8:31~37

「苦難のはざまから主を呼び求めると、主は答えてわたしを解き放たれた(詩編 118:5)。「苦難のはざま」とは「窮屈な場所」、そして「解き放つ」とは「広い場所」という謂。権力の抑圧なのか、自分自身で陥るのか。窮屈はいわば獄であり、救いとは獄からの脱出。自ら陥る獄とは「世は信用ならぬ、教会は期待できない、自分もこんなものだ」という諦め。それが私たちにとっての「苦難のはざま」。

聖霊から「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない(ルカ 2:26)」と告げられた老シメオンは、生涯を賭してメシア(救い主)を待ち続けた。とはいっても長い生涯、待つことが窮屈だったこともある。その度に「主を呼び求め」、「広々とした場所」に立ち戻ってメシアを待っていたのではないか。

「主はわたしの味方、わたしは誰を恐れよう。人間がわたしに何をなしえよう(詩編 118:6)」。詩人は窮屈な場に囚われながらも、広い場所へ解き放たれる救いを、その身をもって知っている。「わたしは誰を恐れよう」という言葉遣いは、後の時代、キリスト者となったパウロによっても用いられる。

「もし神がわたしたちの味方であるならば、誰がわたしたちに敵対できるか(ロマ 8:31)」、「誰が神に選ばれた者たちを訴えるか(8:33)」、「誰がわたしたちを罪に定めるか(8:34)」、「誰がキリストの愛からわたしたちを引き離すことができるか(8:35)」。「誰が、誰が、誰が」と畳み込み、何びとたりとも私たちを「苦難のはざま」に押し込みえない、ときっぱり宣言する。「神が味方」であるがゆえに(8:31)。

旧約の詩人にとっても「主はわたしの味方(詩編 118:6~7)」であることは重要であった。それでは何によって神が「味方」であり給うのか。切実に訴えて神を説得するのか(神を引き寄せる)。とんでもなく違う。必死に祈り、悔い改め、御心に従って神に近づくのか(私たちが神の味方になる)。微妙に違う。その根拠はただ一つ、それがすべてだ。復活なさったキリストの「執り成し(ロマ 8:34)」によって、「賜られる(8:32)」、「キリストの愛(8:35)」ゆえに、神は私たちの「味方」としてあり給う。

現代を生きるキリスト者には、「神に敵対してしまう」と嘆く者がいる。また軽率に背信を気どる者は案外多い。何事かで私たちが神に敵対したとしても、「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさら(5:10)」。つまり執り成されている和解ゆえに、究極的には敵も味方もないのだ。善人も悪人も罪を負っているが、「人を義としてくださるのは神(8:33)」なのだから、自分の罪に脅迫されることはない。「苦難のはざま、窮屈な獄(詩編 118:5)」に自ら陥ることはない。十字架の和解こそを信頼せよ。

「わたしたちの主イエス・キリストによって示された神の愛(8:39)」には、人と世を遥かに超える途方もない深さと広さがある(ロマ 8:38~39)。日本語で「愛」と言うと虚構めくが、もうこれは「愛」としか言いようがない。「お大切」とか「慈悲」と訳したっていいのだが、感情に偏り過ぎる。「誰が、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができるか(8:35)」。何びとたりともできない。いかなる悪意によっても、自己の幻滅や諦めの苦難にもできない。このキリストの愛が世に満ちている。



【おまけのひとこと】

窮屈は獄だが 獄に馴染んだ者には安寧であろう 未知をきり拓くことなく ただ反応すればいいのだから 皮衣を着せられて楽園を旅立ったのに(創世 3:21) 楽園という獄に逆戻りするつもりか